

「寂しさを埋める」

総園長 宮下 智

I.Yさんと言えば、なんといっても「ウンコのプレゼント」が強烈な印象だ。ニヤニヤして寄ってきて、何か楽しいことでもあったのかな？と思わせるその時に、支援職員の目の前に差し出されるのが手のひらの上のウンコなのである。支援職員にしてみれば、びっくりポンとできごとなのだが、そのような行動は彼のお気に入りの支援職員に対してしか生じないので、私たちはその行動を「仲良しの印」と呼んで、しゃべれない彼の貴重なポジティブメッセージとして笑顔と感謝で受け止めていた。

その背景には、精神分析に、2才児がちょうどお便所で大便ができるようになることを捉えて「排便は自分を愛してくれている母親に対する感謝のプレゼントである」というような理解方法があることや、かの糸賀一雄さんの著作「この子らを世の光に」の中で、確か第二びわこ学園の実践だったと思うのだが、最重度の心身障がいの園児さんが最愛の保母さんのところへニコニコしながらウンコを見せに来る（おそらくたどたどしい歩き方なのだと勝手に想像したが）という件があって、それを彷彿とさせたからである。

また、30年前、学童期の彼には、度々の自家中毒があった。いわゆる周期性嘔吐で、点滴を打っては治癒をするということを一年中何回となく繰り返していた。総じては明るく元気な彼だったので、大きな心配やケアをすることもなく、年齢を重ねていったら自然になくなっていくだろうくらいの気持ちでのおつきあいだった。

彼の花の水やりも忘れられない。隙を見ては屋外に出て、ジョーロで花に水をかけるのである。あまり上手ではないやり方なので、本人も花壇も常に水でビタビタである。この上もない喜びようで、身体全体で喜びを表現しながら満面の笑みで水をやっている。

周期性嘔吐も花の水やりも、本人の意思決定を大切にしながら定期的で確実な帰省や面会、そして電話のやり取りなどの標準的な家族支援の提供でいつしか姿を消していったが、振り返れば、周期性嘔吐は特に母子関係に係わる寂しさの表現であったと理解できるし、過剰な喜びようの水やりは、明星では「良い子症候群」と名づけられている過剰適応の姿であると理解ができる。「帰省・面会できなくて寂しい」が周期性嘔吐であり、「こんなに良い子だから、帰省・面会できるよね」が花の水やりだったのである。両親の勤め先は大きな旅館で、お正月やお盆など、ご両親が休みを取れ、多くのメンバーさん方が帰省する時期が、逆に繁忙期で、なかなか本人が思うような帰省・面会ができないことが一番の原因だった。



そんな彼には、ここ十年以上、一日数回にわたる弄便の姿があった。特に夕飯の後、パジャマに着替えるタイミングの時間帯で発生した。居室で裸になって床に排便をして、それを顔に塗りつけるのである。その姿で支援職員の前に登場となる。

この対応には苦戦した。A男性支援職員が出勤の時には弄便は何にもないというから、他の支援職員と支援内容のどこが違うか検討したが、少々声をかける回数が多い程度の発見しかできず、それを真似てみても他の支援職員では弄便を減らすことができなかった。I.Yさんの父親はすでに逝去していたから、H男性支援職員は良き父親像を映していてもなども考えたが、支援職員全員がそんなイメージを背負うことは困難であるし、根本的にこの課題行動を減じるような持続的な支援方法は見つからないままだった。

また、B女性支援職員の時にも弄便がないという。こちらはどうも悪い母親像の投影であるというような理解方法に至ったが、このA支援職員、B支援職員の出勤時の本人の行動の違いは、うっすらとこの弄便の原因が、父や母との関係に基盤があるのではないかというヒントを与えてくれていた。

そこで成育歴・・・

彼は両親が勤める旅館の一室で、いつも一人で両親の帰りを待っていたらしい。仕事こそ忙しかったが、子煩悩のご両親は合間を縫って、温泉に入れてくれたり、ドライブに連れて行ってくれたようだ。彼は父親のことも、父親の愛車だったジープのことも、マイクロバスのことも、帰省・面会のことも「パス！」と表現していて、それは父親に対する愛着が確かなものだったことを私たちに教えてくれていた。

それでも旅館の一室で、一人でご両親を待つ時間は圧倒的に長く、寂しかったに違いないと思う。

そこで考えた。彼が一番弄便をする時間帯、その時間帯は彼が昔、幼い頃に一番淋しさを感じる時間帯なのではないかと。彼が旅館で暮らしていたころ、夕食を食べたその後の時間、おそらく旅館は、夕食の

片づけ、お客さんへの対応などで一日の中で最も忙しい時間帯に違いない。待てども待てども帰ってこないご両親、おそらくご両親の帰りは深夜になったのではないかと想像した。

考えてみれば、入所時から続いていた両親のそばで暮らすとかができなかった寂しさを埋める作業は終わっているわけではなかった。40才代になった今でも帰省や面会は心からの楽しみだし、母との電話だっていつでも心待ちにしている彼なのだ。

そこで、夕食後のパジャマに着替える時間帯、それは両親が遠く寂しさのフラッシュバックが生じる時間帯なのではと考えた。そして、それを解決するために、実家から離れ難くなっているその寂しい心をそのまま認め、居室を実家のある白樺湖に見立てて、その空間に入ればいつでも父や母、そして小さい頃から困ったときにはいつでも助けてくれる女将さんと、なんだか一緒にいる気分になれるような工夫ができないかと考えた。

まずは、パジャマへの着替え、これを止めた。一人ぼっちになる夕方から深夜へのスイッチの意味を果たしているのではないかと考えて、昼間のままの姿でいることに決めた。次には、普段用、外出・帰省用と本人が差別化していた服の使用の区別を止めて、四六時中、外出・帰省用の服で暮らすことに決めた。これでいつでも実家気分だ。着替えの服も押し入れにしまい込むことを止めて、常に本人の目に触れることができるように壁に吊るした。壁には一面に、白樺湖周辺の写真、父や母、そして女将さんと楽しく過ごしている写真を貼った。アルバムを用意して、いつでも身近でお気に入りの写真を見ることができるようにした。アルバムの中には、彼の笑顔があふれていた。その空間で、彼はタブレットでユーチューブを見た。彼の選択は「バス」と「演歌」、ともに帰省のイメージが重なっているものだ。「演歌」は、父親のイメージなのだろう。帰省のジープの中ではいつでも父親好みの演歌が流れていたに違いない。

そんな実践が次々と始まったのが、ちょうどコロナウィルス感染のクラスターが収まった令和4年の12月の初め、気がつけば12月の下旬には弄便は激減していた。

10年以上も続いていた弄便が収束していく、それを目の前で確認する中で、私たちにはたくさんの反省がある。まず、排便をしてそれを顔に塗って支援職員の前に来る、その行動をどのくらい真剣に彼の気持ちの表れとして受け止め、考えつくすことができていたのか？具体的な支援方法に結びつけるためにどのくらいの誠実さをもって考えることができていたのか？弄便そのものは、その後の対応にはシャワーを浴びたり着替えたりと少々手間がかかるが、けが人が出るわけでもなく、物も壊れるわけでも無いというような、いわば大事にならない事柄を前にして、何年も弄便を繰り返す中で、いつしか「Iさんは弄便する人」というレッテル貼り(ラベリングという)をして、それ以上の探求をさぼっていなかったか？つまり彼の気持ちに寄り添うことを忘れていなかったか？

今回、この課題解決のために、何回かのミニケア会議なるものが開催されている。支援状況を何年にも渡ってまとめ直し、グラフを制作して、ことの因果を探った。罪滅ぼしのような作業だったが、支援提供のPDCAは見事に回った。

伝わるまで行動を止めない、今回は弄便だが、彼らの主張は、いつでも手厳しい。それが私たちが支援の歩みを止められない理由なのだが・・・

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp/>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1/>